

# 願い

星 弘道

Koudou Hoshi

作品を書く時は頭の中で構図を描きながら撰文をします。特に少字数においてはその傾向が強く顕れます。

佛教では、修行について「欠けたところを補うことである」と説きます。本来完全なものが、なんらかの理由で欠けて破損した場合そこを修復して、本来の完全にもどす作業が修行であるといわれています。

書も、書いていくうちにイメージしたものとどんどん懸け離れてゆく場合が多くあります。そのように迷いの中に入ってしまうとなかなか出口が見つからなくなります。

理人と行人といいますが、理屈から入っていくと迷いは深くなる傾向が強く、なかなか抜け出せないものです。

書も同じでこう書かなければならないかと思えば思うほど良い作品は生まれてこないようです。

私のモットーとしているところは、常日頃は作品ではなく臨書中心に書いています。これは、迷った時の脱出方法です。迷ったら返

れが一番だと思っているからです。

書はとてつもない表現が出来る場合がありますが、その反面いくらやっても作品にならぬ場合があります。その時には、常日頃臨書しているものを繰返しやっけていきます。そうすると作品に向って迷っていた時を忘れ、ひよつと光明が差しこみます。その時に思いがけないものが生まれてきます。この作は、そんな時に生まれた作品です。大きな紙面に二文字ですので、ほんの少しのズレが誠に見づらくしてしまいます。常に心懸けていることは奇をてらうことはせず自然な表現で、その中にしっかりした存在感を有する作が出来ればといつも思っています。

然し実現は難しいですが、少しでも補修が少なくなることを願って書作しています。



穆遠

115×213cm